リカバリー・パレード「回復の祭典」2022 in 神奈川 開催報告

リカバリー・パレード「回復の祭典」in 神奈川 2022 実行委員会（委員長＝城間勇）は 2022 年 11 月 19 日（土）午後、横浜市中区の象の鼻パークにて、リカバリー・パレード「回復の祭典」in 神奈川 2022 を開催いたしました。その内容および経緯等につき、以下の通り、ご報告いたします。

1. 開催概要

日時：11 月 19 日(土)13 時～15 時 30 分（延長セッション含む）
場所：横浜象の鼻パーク（神奈川県横浜市中区）「開港の丘」周辺
主な内容：
回復者・家族・回復の友人（支援者）のスピーチ
琉球太鼓（エイサー）
当事者らの歌（コンサート）

2. 主催等

主催：リカバリーパレード「回復の祭典」 in 神奈川 2022 実行委員会
実行委員長：
城間勇（リカバリー・パレード「回復の祭典」東京・横浜 2021 実行委員会 事務局長）
副実行委員長：小林博
後援：
横浜ダルク、川崎ダルク、館山ダルク、千葉ダルク、
横浜依存症回復擁護ネットワーク（Y-ARAN）、あざみ野ファミリー12 ステップ
医療法人誠心会 神奈川病院
事務局：
特定非営利活動法人横浜依存症回復擁護ネットワーク（Y-ARAN）内
電話・FAX 045-353-9130　E-mail：rikapare@y-aran.org

3. 開催に至る経緯

(1) 実行委員会

2022 年 9 月 4 日夜、zoom にて第 1 回実行委員会を開催した。当日までに計 13 回、夜の時間帯を使って実行委員会を開催したほか、連絡・調整手段として LINE グループを作成し、やり取りした。集まった実行委員 10 名余の半数以上は依存症などの医療関係者だった。

(2) 対象地域

従来、神奈川県内では、横浜市内の団体・個人を中心に、リカバリー・パレード「回復の祭典」in 横浜が開催されてきた。コロナ禍のために 2020 年は中止、2021 年は東京と合同でオンライン形式で実施された。2022 年は対象地域を横浜市内から神奈川県内に拡大することとし、神奈川県内の関係者に呼び掛けた。横浜の前実行委員会三役の了解も得た。

(3) 形式・テーマ・内容等

テーマについては、「依存症の回復」をメインとし、あわせて心の病からの回復にも配慮す

ることを確認した。
　リアルでの開催を前提として準備を進めた。会場については、過去、リカパレ in 横浜が実施されたこともあること、予算の妥当性などから、象の鼻パークとした。
　コロナ禍の影響の見極めや準備体制の制約から、街頭パレードは実施せず、公園内で「回復のスピーチ」「楽器演奏と歌声」「琉球太鼓（エイサー）」の三つを大きな柱として実施することにした。
　趣旨に賛同した参加・協力の申し出があったことから、当初から予定の内容に加え、エキストラ（延長）セッションを設け、ボクシングのエキジビションなども行うことにした。
(4) 資金
　リカパレ in 横浜からの引き続いた口座および残金はあったものの、賛同の寄付を募り、できるだけその中で関連費用をまかなうこととした。当日、借用ができる資機材の多くは、協力・後援団体から借用することとした。コピーの大半は、事務局の Y-ARAN でコピーするなどした。（詳細は会計報告参照）

4. 当日の状況・内容
(1) 概要
　当日は天候にも恵まれ、最大時 250 人が足を止め、イベントを楽しんだ。「リカバリー・パレード」ののぼりも目立つ形で設置し、マンガを活用した啓発チラシも配布したことから、たまたま公園を訪れた人も含め、大きなアピール効果を残すことができた。話し掛けたくれた参加者や相談を希望した人には、実行委員等が会話や助言などを行った。
　プログラムは、エキストラセッションを含め、ほぼ予定通りに実施することができた。
(2) 内容
　詳細は別紙プログラムの通り。
(3) 配布物
　スピーチをしてくれた方には、茶、ロゴ入りステッカー、マンガ入り啓発資料などを手渡した。参加者には、マンガ入り啓発資料や後援・協力団体のパンフレットなどを手渡した。

5. 振り返り・反響等
(1) 振り返り
　実行委員・参加者からは、3 年ぶりに対面で実際に顔を合わせることになったことから「やはり実際に集まるのはいい」と声が聞かれた。街頭パレードを取りやめ、公園内の同じ場所でスピーチやアトラクションを実施したことについても、「体験談などを聞くことができ、よかった」など、好意的な声が多く聞かれた。
　今後に向けては、街頭パレードを実施する東京と「役割分担」のような意味合いも込め、「公園内で完結する形もありでないか」などの意見が出ている。また、「外国人の当事者・回復者等の参加も考えたい」、「対面では参加できない人のために、オンラインの余地もあってもいい」などの意見も出ている。
(2) 報道
　実行委員・参加者の SNS などのほか、「福祉新聞」でも掲載された。